View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

論　文　の　要　旨

氏　　名	単　海林
論 文 題 目	魯迅翻訳の研究とその周辺 -テクスト分析と動機付けの解明を中心に-

論文の要旨

1　研究背景

魯迅は中国や日本、ひいては世界中においても作家として広く知られており、その創作や思想面に関する研究は極めて多い。ところが、その創作に負けないほど、400 万字に及ぶ訳業に目を向けた研究者は今も尚少ない。それに、魯迅翻訳の研究においても、関連文献及び史実に基づいたものがほとんどであり、テクスト対照分析に基づく実証研究は皆無に等しい。

魯迅が翻訳を手がけてから 15 年を経てデビュー作と呼ぶべき『狂人日記』を完成させたが、それは魯迅の翻訳の営みと切っても切れない関係がある。翻訳と創作は魯迅の生涯の文学活動の両輪なのである。従って、魯迅とその文学活動の本当の姿を知ろうと思うのならば、彼の訳業を無視し、ただその創作のみに目を向けたり、彼に対する定説を鵜呑みにしたりするだけでは到底無理であろう。

2　問題意識

魯迅は 33 年の翻訳活動の中で、14 ヵ国の 105 の作家の約 200 の作品を日本語（大半を占めている）やドイツ語を通じて訳（重訳）している。初期段階の前半の短い期間を除けば、「直訳」という翻訳方法を最期まで魯迅は貫いている。その間、彼の翻訳方法に対する批判が殺到していたにもかかわらず、魯迅はその翻訳方法を変えようとしなかった。

従って、魯迅が「直訳」法にこだわる理由は何なのか、翻訳に対する彼の認識はどんなものなのか、翻訳という手段で何をしようとしていたのか、その翻訳対象が魯迅のどのようなイデオロギーを反映しているか、ひいてはその翻訳法の歴史的意義があるかどうか、といった一連の疑問が浮かび上がってきた。

3　研究目的

本研究の目的は、魯迅の翻訳法、翻訳ストラテジー、翻訳動機を考察し、各時期の魯訳の特徴、更にその翻訳思想を究明すると同時に、魯迅翻訳の歴史的な意義を検討することにある。

4　研究方法

具体的には、魯迅の生立ちや当時の社会背景を整理しながら、魯訳の特徴によってその訳業

備考　要旨は，4000 字以内とする。

の営みを初期【Ⅰ】(1903-1908)、初期【Ⅱ】(1909-1918)、中期(1919-1928.5)と後期(1928.6-1936)に分けたうえで、各時期の魯訳を取り上げ、原文とのテクスト対照分析を行う。翻訳対象の取捨選択、翻訳法などを検討しながら、表層の翻訳法に対し、その深層に潜む魯迅の翻訳動機、翻訳ストラテジー及び翻訳思想を解明してみる。

5　論文の構成

序章では研究背景と問題意識を述べ、研究目的、研究方法について説明する。

第一章では、本研究と関連し得る日本と中国における近年までの魯迅翻訳に関する先行研究レビューを行う。

第二章では、本研究に有効と思われる翻訳理論を取り上げて概観し、魯迅翻訳との関連性について論及してみる。

第三章から第五章までは魯迅の各時期の訳業を対象に、ケーススタディとしてのテクスト対照分析を行う。

第三章では、まず魯迅の訳業を幾つかの時期に分けた上で、その理由を述べる。次に、初期魯訳の翻訳対象になった作品を提示し、その取捨選択に当たる魯迅の意図を探りながら、若き魯迅の経歴と関連付けて彼の伝統文化および外来思潮に対する態度を議論してみる。更に、初期魯訳の翻訳法やストラテジーの考察により当時魯訳の特徴を把握しておく。最後に初期魯訳の動機付けについて分析を試みる。

第四章では、まず「白話文運動」と「言文一致運動」に関連付けて魯訳文体の転換を検討し、1919 年を魯訳文体の転換年とする理由を述べる。次に、中期初め頃の『現代日本小説集』と中期終り頃の『思想・山水・人物』の原文・訳文のテクスト分析を行い、量的な統計を基に、魯迅なりの「翻訳法則」の定着化を検討する。その上、『羅生門』とその魯訳、そして他の六本の中国語訳との対照、対比分析を行い、魯迅の直訳法、異化ストラテジー及び抵抗式翻訳を考察する。また、『苦悶の象徴』や『象牙の塔を出て』における厨川白村の文芸論を記述し、魯迅の思想との共通点を議論しながら、魯迅の翻訳動機を解明する。

第五章では、まず後期魯訳におけるソ連文芸論の訳業を「梁魯論争」に関連付けて議論する。それから文芸論の魯訳の特徴と、小説の魯訳の特徴を実証的に考察してみる。最後に魯迅の童話翻訳の特徴や動機についてテクスト分析を行いながら論を加える。

第六章では、魯迅の翻訳法の現実的意義を確認したうえで、現代中国語、現代中国文学及び現代美術の発展への貢献を検討してみる。また、魯迅の翻訳活動とその創作活動との相関について分析を試みる。更に、中国で神格化された魯迅のイデオロギーを議論したうえで、魯迅の訳材との関連性を提示してみる。

終章では、本研究で得られた結論をまとめた上で、残された課題と研究の展望を述べる。

6 結論

(1) 魯訳の特徴

初期魯訳【Ⅰ】は意訳や編訳の訳法を採っており、翻案、帰化という傾向が強い。訳文体は

文語が主であるが、白話文に近い文語も試用されている。この時期において、魯迅の中に熟した「翻訳理念」がまだ形成されていない。

「初期【Ⅱ】に入ると、意訳法から直訳法にシフトし、原文志向の傾向を見せ始めた。文言は相変わらず文語がメインである。そのため、直訳法を採っているものの、抵抗・異化翻訳の傾向はまだそれほど強くない。この時期は魯訳の「空白期」と言える。

中期に入ると、魯迅には自分なりの翻訳法則が徐々に形成され、直訳法や抵抗・異化ストラテジーといった特徴も顕著になってきた。直訳法や異化ストラテジーは魯迅の「翻訳豊饒観」を反映している。

1928 年 6 月に、魯迅はソ連文芸論の訳業に本格的に取り組み始めた。文芸論自身の難しさや魯迅の直訳法、抵抗式ストラテジーが原因で、文芸論の魯訳は難解なものになる。しかし、同じ技法、ストラテジーを採った小説翻訳の場合はそのような傾向はそれほど強くない。そして 1932 年に後期後半に入ると、文芸論の翻訳から手を引いて再び小説翻訳に転向した魯訳は、ほぼ同様の翻訳法を採っているものの、直訳、抵抗式翻訳の雰囲気が些か薄まっていった。

(2) 魯迅の翻訳動機

魯迅の翻訳動機は複雑なものだが、「中国語改良」と「民魂造り」が主な動機である。

翻訳を通して優れた文学作品や文芸思潮を紹介すると同時に、積極的に異質なものを取り入れ、中国語の語彙、文法、表現などを豊かにしようと魯迅は苦心している。

「民魂造り」は、魯迅の生涯の一貫した願いでもある。「文明への開眼」、「集団無意識への反省」、「圧迫への反抗精神」、「個々の人間としての成長」のいずれもこの「民魂造り」に包含されるものである。魯迅は自分の翻訳活動を国民性改造と社会改革と結びつけているのである。魯迅は翻訳を通じて病んでいる社会諸相、いわゆる社会文明批判をしている一方、「自由博愛」、「自己批判」を主題とした訳作を続々と出しながら、他人の「自己」を尊重しなければならないと訴えているのである。

(3) 魯迅翻訳の歴史的意義

魯迅の「直訳法」、「抵抗・異化」翻訳は民族主義的翻訳方法、翻訳策略に抵抗し、自国言語・文化を反省しながら、異質なものを積極的に取り入れた。いまだに「目標側言語文化に近い、流暢かつ美しい」訳文が求められる翻訳界の実践の場に示唆を与えている。魯迅翻訳は一般に言われる「翻訳」より、もっと高い次元に立っているのである。積極的に異質なものを取り入れようとした魯迅の「翻訳豊饒観」、そして「魯迅」そのものは、現在の翻訳界及び保守的社会に必要なものである。

魯迅の翻訳活動は現代中国文学の発展に大きな貢献をしている。その翻訳活動は自分の創作活動にだけでなく、他の文学者たちにも大きく影響を与えている。魯迅と魯迅翻訳の影響で大きな業績を残した翻訳者や文学者が多くいる。

魯迅の翻訳は中国現代木版画の発展にも大きな貢献をしている。魯迅は「中国新興版画の父」とされており、魯迅と魯迅翻訳の影響を受けた版画家が数多くいる。また、魯迅の翻訳言語は

現代中国語の形成にもそれなりに影響を及ぼしている。

魯迅の 33 年の翻訳活動は、本人の意図と関係なく、結果としては異文化接触のプロセスそのものとなり、歴史的に見ると、その訳業は翻訳学、言語学、文学、芸術のいずれの面から見ても価値の高い営みであり、異文化理解、そして異文化受容を促す上で大きな役割を果たしているのである。

(4) 本研究の主な成果

本研究は、従来の抽象論的な先行研究と違い、実証的な手法を用いて原文と訳文テクスト対照分析を行った結果、主に以下の5つの成果が得られた。

① 先行研究における時期の分け方の不適切なところを指摘し、魯迅の訳業をその特徴によって厳密に分け、各時期における魯訳の翻訳法、翻訳ストラテジー及び翻訳動機を解明した。

② 各時期の訳文体の特徴を明らかにしたうえで、意訳法から直訳法にシフトした年及びその代表作、訳文体が白話文に転換した年及びその代表作、そして魯訳の「空白期」を究明し、更に文芸論の魯訳が難解な原因を考察した。また、魯迅の翻訳観を「翻訳豊饒観」と定義づけた。

③ 魯迅自身の言説を過信した先行研究の誤りを是正し、テクスト対照分析に基づき、魯迅の童話翻訳は子供向けのものでもなければ、その翻訳法も意訳ではなく直訳であることを立証した。

④ 翻訳の異質性の保持を重視し、翻訳の啓発の機能を重んじる魯迅の翻訳思想は原文志向を見せており、それがナイダの「形式的等価」理論、チェスターマン「再現的翻訳倫理」、翻訳とは自国言語・文化の方向に訳すのではなく、起点言語文化の方向にするものだと主張したルドルフ・パンヴィッツの翻訳思想、翻訳によって「純粋言語」の形成を求めるベンヤミンの翻訳思想と酷似するものである。

⑤ 魯迅の翻訳がその創作活動との相関、そして現代中国語の形成、現代中国文学及び現代木版画の発展に及ぼした影響考察したうえで、魯迅のイデオロギーを検討し、その翻訳活動との関連性を提示してみた。

備考　要旨は，4000 字以内とする。